

日本動物考古学会 第8回大会 プログラム・抄録集

2021年7月3日（土）・4日（日）
〔オンライン開催〕

大会の注意事項（必ずお読み下さい）

- ・オンライン発表の録音や録画（画面キャプチャ含む）を禁止いたします。
- ・発表者に接続障害などトラブルがあった場合は、プログラムの発表時間が変更になることがあります。
- ・大会の進行を妨げる行為や参加者の迷惑となる行為があった場合は、強制的に退室していただくことがあります。
- ・通信障害や不具合に関する技術的なサポートはできませんので、あらかじめご了承ください。

大会スケジュール

| 7月3日（土） | | 7月4日（日） | |
|-------------|-----------|-------------|-----------|
| 12:30～ | Zoomの入室開始 | 9:30～ | Zoomの入室開始 |
| 12:50～13:00 | 開会の辞 | 10:00～11:20 | 発表 |
| 13:00～14:00 | 研究発表 | 11:20～12:30 | 休憩（50分） |
| 14:00～14:20 | 休憩（20分） | 12:30～13:50 | 発表 |
| 14:20～15:20 | 研究発表 | 13:50～14:10 | 休憩（20分） |
| 15:20～15:40 | 休憩（20分） | 14:10～15:30 | 発表 |
| 15:40～16:20 | 研究発表 | 15:30 | 閉会の辞 |
| 16:30～ | 総会 | | |

研究発表プログラム

7月3日（土）

Zoomの入室開始 12:30～

開会の辞 12:50～13:00

研究発表

13:00～13:20 「**「端平頭」を有する骨角器の機能と用途について**」
青野友哉（東北芸術工科大学）

13:20～13:40 「**遺跡出土マグロ属の体長推定と体長組成**」
松崎哲也（奈良文化財研究所）

13:40～14:00 「**素材の獲得からみた東北地方太平洋沿岸域におけるフネガイ科製貝輪の研究**」
山田凜太郎（京都大学大学院）

（20分休憩）

14:20～14:40 「**群馬県居家以岩陰遺跡出土の動物遺存体から見た縄文早期の動物資源利用
－2017・2018年資料を中心に－**」
○山崎京美（國學院大學）・黒住耐二（千葉県立中央博物館）・江田真毅
（北海道大学総合博物館）・大内利紗（國學院大學）・谷口康浩（國學院大
學）

14:40～15:00 「**イボキサゴの形態変異からみた古環境復元への試案**」
畑山智史（船橋市飛ノ台史跡公園博物館）

15:00～15:20 「**千葉県北西域における縄文時代後期の貝類利用とその時期差**」
坂本匠（京都大学大学院）

（20分休憩）

15:40～16:00 「**下田原貝塚と八重山諸島における先史漁撈の再検討**」
○小野林太郎（国立民族学博物館）・片桐千亜紀（沖縄県埋蔵文化財セン
ター）・大堀皓平（沖縄県教育庁文化財課）・クララ・ブランジェ（パリ自
然史博物館・国立民族学博物館）

16:00～16:20 「**先史時代琉球列島におけるイノシシ属の利用について**」
○青野圭（総合研究大学院大学）・本郷一美（総合研究大学院大学）・片桐
千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）

総会 16:30～

7月4日（日）

Zoomの入室開始 9:30～

研究発表

- 10:00～10:20 「縄文時代前期の北陸地方における採貝活動
－淡水域から汽水域の利用を中心として－」
小島秀彰（若狭町歴史文化課）
- 10:20～10:40 「弥生時代におけるニワトリの継代飼育の可能性を探る
－奈良県田原本町唐古・鍵遺跡資料の検討から－」
○江田真毅（北海道大学総合博物館）・泉洋江（北海道大学総合博物館）
・米田穰（東京大学総合研究博物館）・藤田三郎（田原本町教育委員会）
- 10:40～11:00 「古墳時代のヤマトにおける牛馬渡来と普及」
丸山真史（東海大学）
- 11:00～11:20 「群馬県金井遺跡群における鹿角利用」
山崎健（奈良文化財研究所）
- （50分休憩）
- 12:30～12:50 「古病理と解体痕による中世馬の用途の検討」
植月学（帝京大学文化財研究所）
- 12:50～13:10 「羅臼町オタフク岩洞窟および北見市中ノ島遺跡出土ヒグマ遺体の年代と
安定同位体比－「熊送り」儀礼の起源と前近代の挙行形態をめぐって－」
○佐藤 孝雄（慶應義塾大学）・松林順（国立研究開発法人水産研究・教育
機構）・米田穰（東京大学総合研究博物館）
- 13:10～13:30 「1640～1663年に限定される貝塚の動物遺体－北海道伊達市
カムイタブコブ下遺跡からみる近世アイヌ文化期の生業活動－」
○三谷智広（株式会社パレオ・ラボ／同志社大学文化遺産情報科学調査研
究センター）・添田雄二（幕別町教育委員会）
- 13:30～13:50 「四谷一丁目遺跡における鳥類利用」
○許開軒（北海道大学大学院）・江田真毅（北海道大学総合博物館）
- （20分休憩）
- 14:10～14:30 「考古学から見た北海道のマルタニシ」
○松本建速（東海大学）・桑原康裕（北海道立総合研究機構水産研究本部
栽培水産試験場）
- 14:30～14:50 「中国地方におけるカワニナの食習俗」
○遠部慎（島根大学山陰研究センター）・松田凌馬（愛媛大学）
- 14:50～15:10 「遺跡出土骨の全ゲノム解析における方法論的検討」
覚張隆史（金沢大学）

閉会の辞 15:10

Zoom参加の手引き

● 事前準備

必要な機器

- ・インターネットに接続できる機器（パソコンを推奨）が必要です。
- ・ノートパソコンにはマイクやカメラが内蔵されている場合が多いですが、デスクトップのパソコンには内蔵されていない場合があります。**その際は外付けのマイクやWebカメラが必要になりますのでご注意ください。**
- ・安定した接続環境を確保するために、有線接続が望ましいです。

Zoomアプリのダウンロード

- ・大会参加までに、公式サイト（<https://zoom.us/download>）から、Zoomのアプリをインストールしておいて下さい。
- ・パソコンの場合は「ミーティング用Zoomクライアント」からダウンロードします。【左下図】
- ・Zoomのアカウント作成は不要です。
- ・すでにインストールされている方も、セキュリティ確保のため、常に最新版にアップデートするようにして下さい。

Zoomアプリの動作確認

- ・インストールが完了したら、ミーティングテスト（<https://zoom.us/test>）に参加します。
- ・「ミーティングテストに参加」【右下図】
 - 「（Zoom Meetingを）開く」あるいは「ミーティングを起動」
 - 「コンピューターでオーディオに参加」
 - カメラやスピーカー、マイクの動作確認をして下さい
- ・動作確認をしたら、画面右下の「退出」をクリックして終了です。
- ・ご使用の機器によっては画面の表示が異なる場合があります。予めご自身で確認して下さい。



● 大会への参加方法

- ・大会への招待メール（6月下旬送信）に記載されているURLをクリックすると、大会会場へ入室できます。
- ・初日（7/3土）は12時30分、2日目（7/4日）は9時30分から入室が可能です。

● 名前の登録

- ・大会参加者を把握するために、名前を「氏名（所属）」に変更して下さい。
例：動物太郎（考古大学）
- ・画面下部の「参加者」をクリックして、参加者一覧から自分の名前にマウスを近づけて「詳細」をクリックし、「名前の変更」を選択します。



● マイクとカメラの設定

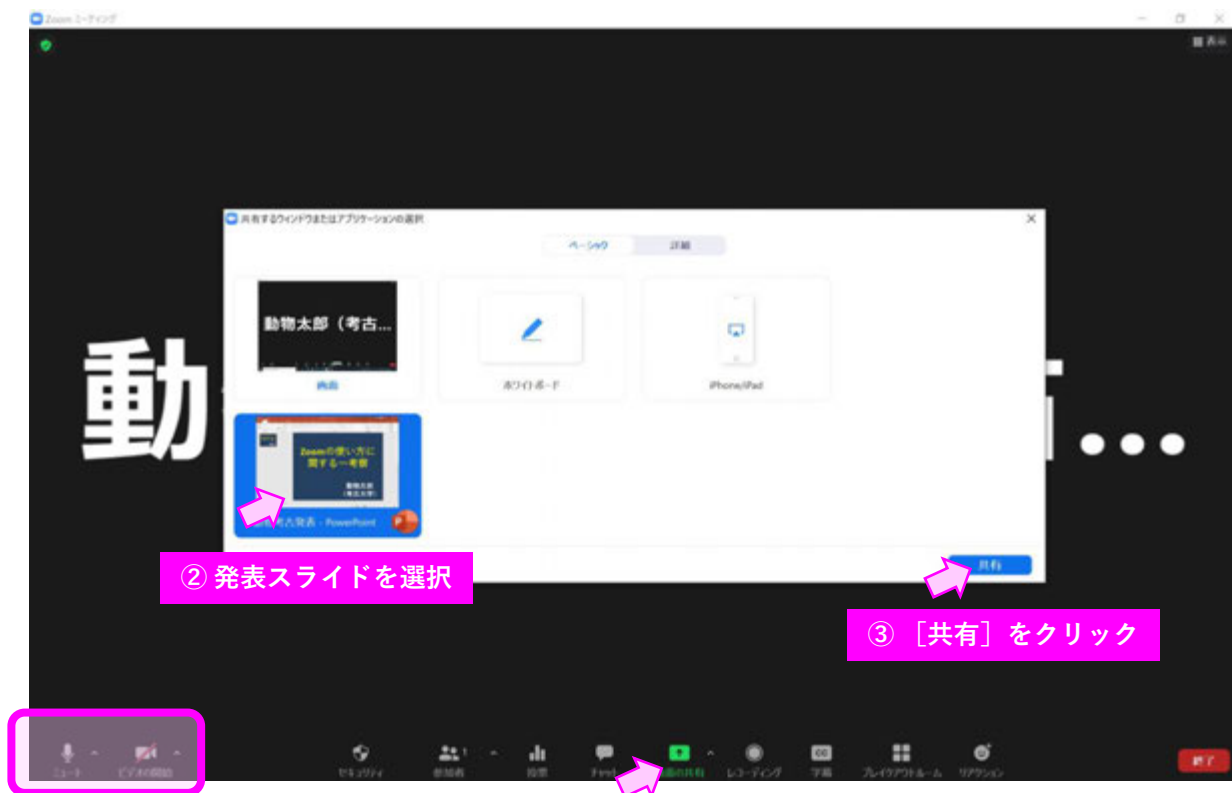
- ・原則、大会参加中はマイク（ミュート）もカメラ（ビデオ）もOFFにして下さい。



● オンライン発表

発表の方法（発表者）

- ・発表者は、発表の30分前には必ず入室して下さい。
- ・司会から紹介を受けたら、マイクとカメラをONにします。
- ・発表は20分（発表時間15分、質疑応答5分）です。10分、15分、20分に口頭で時間をお伝えします。
- ・画面下部の「画面を共有」をクリックし、発表スライド（パワーポイント）を選択して、画面右下の「画面の共有」を押すと、参加者にも同じ画面が見えるようになります。
- ・パワーポイントの発表者ツールはうまく画面共有できないことが多いようです。不慣れな場合は、発表者ツールを使用せずに発表することをお勧めします。
- ・発表者が画面の共有をできなかった場合には、運営側が事前提出の発表スライドを共有します。
- ・質疑応答を終えたら、画面上部の「共有の停止」を押して、マイクとカメラをOFFにします。



② 発表スライドを選択

③ [共有] をクリック

① [画面の共有] をクリック

- ・司会から紹介を受けたら、発表者はマイクとカメラをON
- ・質疑応答を終えたら、発表者はマイクとカメラをOFF

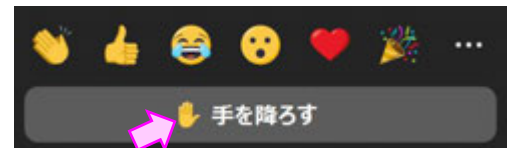
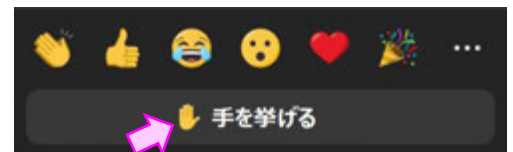
画面を共有しています

共有の停止

- ・この画面が上部に出たら、共有できています
- ・発表・質疑応答が終了したら、[共有の停止] を押ししてください

質問の方法（参加者）

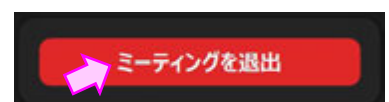
- ・質問やコメントがある方は、画面下部の [リアクション] → 「手を挙げる」 をクリックして下さい。（チャット機能は使いません）。
- ・司会から指名されたら、自身で画面下部のマイクとカメラをONにして、発言して下さい。
- ・質疑応答が終わったらマイクとカメラをOFFにします。
- ・指名の有無に関わらず、次の発表になったら [手を降ろす] をクリックして下さい。
- ・対面開催による質疑応答よりも、時間がかかる可能性が高いです。時間の制約などから多くの発言希望者に対応できない場合がありますことを、あらかじめご了承ください。
- ・希望した発表者は、プログラムに発表者のメールアドレスを掲載しています。大会後の質疑応答や交流にご活用ください。



- ・司会から指名されたら、質問者はマイクとカメラをON
- ・質疑応答を終えたら、質問者はマイクとカメラをOFF

● 退室

- ・画面右下の [退出] → [ミーティングを退出] をクリックすると、退出できます。
- ・大会への招待メール（6月下旬送信）に記載されているURLをクリックすると、大会へ再び入室できます。



3日(土)
13:00～13:20

「端平頭」を有する骨角器の機能と用途について

青野友哉(東北芸術工科大学)

tomoya.aono@icloud.com

本発表の目的は、これまで刺突具として一括されてきた棒状の骨角器のうち、鋭利に尖る一端と平坦な一端をもち中央部に突起ないしは段を有するものについて、その機能と用途を解明することである。対象資料は北海道北黄金貝塚出土の縄文前期の骨角器7点である。材質は鹿角で、規格は全長5.3～8.9cm、最大幅0.7～1.3cm、最大厚0.4～0.6cm、形状は棒状で側面観が反っている点と一端が楕円形の平坦面を持つ点が特徴である。

分析は①形態と規格による型式分類、②各部位の形態的特徴と破損痕跡の観察による機能部位の推定、③顕微鏡による製作痕跡と使用痕跡の観察による使用方法の推定を行った。

棒状骨角器の破損痕跡は、7点中2例が先端部の欠損、6例が平坦な端部の小さな剥離であり、先端方向へ力を加える際に平坦面に加圧されたと考えられた。また、顕微鏡による観察では、先端部には製作時の石器刃部による長軸方向の線状痕と使用時についた短軸方向の線状痕があり、先端部を突き刺して捻った結果と捉えられた。一方、先端部以外には製作痕跡のみが見られ、平坦面の破損状況と考え合わせると柄の装着が想定される。突起と段の機能は刺突の際に手元を守るストッパーの可能性はある。

以上のことから、「端平頭」を有する骨角器は刺突とテコの原理で押し剥がす機能が想定された。用途はカキ類の採取や殻剥きなどが想定されるが、今後、民俗資料との比較や共伴する貝種の検討を行う必要がある。

Examination of the Function and Usage of Bone Tools with a Flat End

Tomoya AONO

遺跡出土マグロ属の体長推定と体長組成

松崎哲也（奈良文化財研究所）

tetsuya.mtzk@gmail.com

遺跡出土魚骨から体長復元を試みる研究は、漁獲対象魚の大きさを明らかにするとともに、生態学的知識を援用することで漁法や漁期の推定につながる知見が得られる。本発表ではマグロ属を対象に実施した結果を述べる。

マグロ属は縄文時代以降全国各地で出土例があり、とくに椎骨は頭部に比べて頑丈であるため遺跡に残りやすい。そこで、東北地方の縄文時代前期の貝塚から出土したマグロ属の椎骨を対象として、計測値を現生標本と比較することで推定される体長を求めた。椎骨は同一個体であっても部位や計測点によってサイズが大きく異なる。そのため、松崎（2019）に従って種を同定し、部位を形態的特徴からA～Gの7グループに分類した。計測点には椎体前面の横径を使用した。

分析の結果、出土したマグロ属はクロマグロのみが同定され、体長は最大約220～230cm、最小約18cmと推定された。体部の中央にあたるCグループ椎骨をもとに体長組成を求めたところ、体長20～40cm前後と120～140cm前後の2箇所ピークが認められ、最も出現頻度が高かったのは120～140cm前後であった。また、体長50cm前後の個体は全く含まれず、200cmを超えるものが出土することは稀であった。以上のことから、縄文時代前期には大型のクロマグロに加えて、小型のものも漁獲していたことが明らかになった。クロマグロの生態を考慮すると、上記の結果が得られた要因にはクロマグロの来遊季節および漁撈活動の季節性が関わっていると考えられる。

Size Estimation and Size Distribution of *Thunnus* sp. in Archaeological Site

Tetsuya MATSUZAKI

3日(土)
13:40~14:00

素材の獲得からみた東北地方太平洋沿岸域における フネガイ科製貝輪の研究

山田凜太郎 (京都大学大学院)
yamada.rintaro.47m@st.kyoto-u.ac.jp

東北地方太平洋沿岸域では、縄文時代後晩期の遺跡を中心としてフネガイ科製貝輪が多数出土しており、当地域で広く用いられた貝器であったと考えられる。こうしたフネガイ科製貝輪は、宮城県里浜貝塚出土資料を中心とした分析が進められてきており、貝輪の素材や詳細な製作過程があきらかとなっている。一方で、貝輪の素材であるフネガイ科(アカガイ・サルボウ)がどのように入手されていたのかについては不明な点が多い。特にアカガイは内湾深くに生息する貝類であり、仮に安定して入手する方法があるとするならば、それは内湾砂泥性貝類を用いた貝輪における素材獲得の一例として重要な知見となる。そこで本発表では貝輪素材の獲得方法として打ち上げ貝に着目し、里浜貝塚も立地する松島湾周辺を中心とした現地調査を実施した。そして調査結果を元として、里浜貝塚出土資料との比較から打ち上げ貝が使用された可能性や、貝輪素材の選択性などについて検討を試みた。

Study in Acquisition of Materials of Shell Bracelets Made of Arcidae
in The Pacific Coast of The Tohoku Region

Rintaro YAMADA

3日(土)
14:20~14:40

群馬県居家以岩陰遺跡出土の動物遺存体から見た縄文早期の動物資源利用 —2017・2018年資料を中心に—

○山崎京美(國學院大學)・黒住耐二(千葉県立中央博物館)
・江田真毅(北海道大学総合博物館)・大内利紗(國學院大學)・谷口康浩(國學院大學)
yamazaki475@gmail.com

居家以岩陰遺跡は群馬県長野原町に所在し、2014年から國學院大學考古学研究室と科研費共同研究(2017年~)により発掘調査が行われている。その結果、岩陰部は主として縄文早期後葉(条痕文期)に20個体以上の人骨が埋葬された集団墓地として利用されており、前庭部遺物包含層にある灰層は早期中葉(押型文期:10200-9900calBP)の比較的短期間に多量の動植物遺体や炭化材などを廃棄した生活廃棄物層と推定された。岩陰部と前庭部から出土する動物相はほぼ類似し、ニホンジカとイノシシが圧倒的でキジ科を主とする鳥類と合わせ9割となる。とくに前2者は石鏃の陷入痕(ニホンジカ胸椎)、解体痕や調理痕、利器製作痕などがあり、狩猟後に食や道具資源として徹底的に利用された可能性がある。残る1割は僅少なながら淡水・陸・汽水性貝類や淡水魚類、ヘビ・カエル類、小中大哺乳類と多様であり、食用を示す被熱痕や赤色顔料の付着例、利器の可能性のある加工品を含む。海産貝類製品や骨角歯製品はほぼ同時期の長野県栃原岩陰・湯倉洞窟との共通性が指摘できる。また、ヤスリツノガイ(化石)の検出により神奈川県三浦半島との広域交流も推定される。本遺跡は早期中葉以前に遡ることも予想されているが、今回はこれまで得た知見(谷口編2017・2020、國學院大博物館2021)や同時期の類例との比較も加え、現段階で把握できた動物資源利用の特徴を報告する。

Animal Resources Utilization by the Initial Jomon People Based on the Analysis of Animal Remains From Iyai Rock Shelter Site, Gunma Prefecture - With a Focus on the 2017/2018 Materials

Kyomi YAMAZAKI・Taiji KUROZUMI・Masaki EDA・Risa OUCHI・Yasuhiro TANIGUCHI

3日(土)
14:40~15:00

イボキサゴの形態変異からみた古環境復元への試案

畑山智史 (船橋市飛ノ台史跡公園博物館)

本発表では、イボキサゴの貝殻体層状にみられる螺線数の増減に着目し、時期ごとにその形態変異を比較検討した。キサゴ類の形態変異は進化論的観点より、古生物学において古くから注目がなされ、キサゴのイボの出現率から温暖・寒冷化の影響が指摘されている。本研究では、東京湾奥部に位置する千葉県北西部の船橋市を定点として、船橋市飛ノ台史跡公園博物館に収蔵している縄文時代早期後葉の飛ノ台貝塚、前期前半の藤原北貝塚、中期の高根木戸遺跡、後期の宮本台貝塚などより出土したイボキサゴの形態変異を比較検討した。分析の結果、野島式期においては、螺線が平均5本であったが、鶉ヶ島台式期においては、計数できるイボキサゴの出現率が下がり、かつ計数できた個体の螺線が2本であった。黒浜期においては、螺線が平均5本であったが、加曽利E式期になると平均4本となり、螺線3本、2本の個体が出現した。堀之内式期に入ると螺線が再度5本となった。この螺線の増減は、生息していた海況の変化が背景にあり、螺線の増加は温暖化、減少は寒冷化を反映した結果と予想され、イボキサゴを古環境復元の示標として間接的に利用できる可能性が示唆された。さらに炭酸カルシウムで形成されるイボキサゴは、放射性炭素年代測定や酸素同位体比分析が実施できることから、科学分析の援用により直接的な古環境復元の示標にもなると期待できる。

A Tentative Study of the Paleo Environmental Reconstruction Based on
Morphological Variation in the Shell of Button Sea Snail *Umbonium costatum*

Satoshi HATAKEYAMA

3日(土)
15:00~15:20

千葉市北西域における縄文時代後期の貝類利用とその時期差

坂本匠 (京都大学大学院)
sakamoto.takumi.28n@st.kyoto-u.ac.jp

縄文時代後期の下総台地における先行研究では、貝類利用のひとつの側面として、貝類が交易に用いられた資源であった可能性が指摘されている。実際、貝塚の貝種組成や季節性などから、海浜域で採れた貝類が内陸へと運ばれたことが想定されている。一方、貝類利用をめぐる両地域間の関連性についてはまだ議論の余地があると考えられる。

そこで本発表では、千葉市北西域の園生貝塚、東ノ上貝塚、内野第1遺跡の分析を通して、縄文時代後期における貝類利用の時期差について検討を行った。その結果、後期前葉と中葉を境に貝類利用に変化があることが分かった。後期前葉の時期に比べて、後期中葉以降の貝類利用は、特定の二枚貝への集中がみられ、利用する季節も冬季にまとまる傾向が認められた。

今回の検討は、今後、海浜域と内陸における海産貝類利用のあり方を理解する上で重要になると考えられる。

Change in the Use of Shellfish in Late Jomon Prehistoric Japan
from the Standpoint of Trade in Resources

Takumi SAKAMOTO

3日(土)
15:40~16:00

下田原貝塚と八重山諸島における先史漁撈の再検討

○小野林太郎(国立民族学博物館)・片桐千亜紀(沖縄県埋蔵文化財センター)・大堀皓平(沖縄県教育庁文化財課)・クララ・ブランジェ(パリ自然史博物館・国立民族学博物館)

onorintaro@minpaku.ac.jp

沖縄県の波照間島に位置する下田原貝塚遺跡は、1954年に国分直一・金関丈夫氏らによって最初に発掘調査が行われ、次いで1958年に早稲田大学八重山学術調査団によって再発掘された。この二つの発掘により、遺跡下層を中心に出土した下田原式土器は、八重山・先島諸島における先史時代の中で有土器時代の指標的土器とされ、この土器を伴う時期は「下田原期」と呼ばれることが多い。また下田原式土器は、台湾の先史土器や南方との関わりが指摘されてきた経緯があり、八重山・先島諸島における土器を伴う新石器時代の出現を検討する上でも、下田原貝塚は極めて重要な遺跡の一つである。

本発表で紹介する資料は、過去における発掘の中でも最大規模となる1984-1985年にかけて沖縄県教育委員会によって実施された調査で、第1・2・3区より出土した魚類遺存体の再分析結果を報告する。1986年に刊行された報告書では、金子浩昌氏による同定結果が報告されている。再分析においては、この結果を踏まえつつ、金子氏の分析では対象とされなかった部位や椎骨を含めた同定やサイズ分析を実施し、多様な種類・サイズの魚科を確認した。特に大型のサメ類やブダイ科が多い点は特筆に値する。またこれらの結果を基に、下田原貝塚遺跡やその他の八重山諸島内における先史時代遺跡より出土した魚類群の特徴を、琉球諸島内における他の遺跡群から出土した魚類群の特徴と比較し、どのような特徴が指摘できるかについて論じる。

Re-analysis of the Shimotabaru Fish Remains and Prehistoric Fishing in the Yaeyama Islands

Rintaro ONO・Chiaki KATAGIRI・Kohei OOHORI・Clara BOULANGER

3日(土)
16:00~16:20

先史時代琉球列島におけるイノシシ属の利用について

○青野圭(総合研究大学院大学)・本郷一美(総合研究大学院大学)
・片桐千亜紀(沖縄県立埋蔵文化財センター)

aono_kei@soken.ac.jp

イノシシ属はユーラシア大陸に広く分布し、重要な食糧資源として、世界各地で先史時代より人類に利用されてきた。琉球列島でも、この地域に現生人類が渡来した当初からイノシシ属が利用されていたと考えられている。しかし、イノシシ属が琉球列島へどのようにして渡来したのかは明らかにされていない。また、野生のイノシシ(*Sus Scrofa*)を家畜化したブタ(*Sus scrofa domesticus*)は琉球列島に大陸から持ち込まれたとされるが、その時期や経緯についても不明瞭である。

本研究では、琉球列島へのイノシシ属の移住ルートや経緯を研究するために重要な資料であるとされる白保竿根田原洞穴遺跡(沖縄県石垣市)と、先行研究からブタの存在が示唆されている野国貝塚(沖縄県嘉手納町)出土のイノシシ資料の四肢骨や歯の計測および、死亡年齢推定データの収集に着手した。

本発表では、白保竿根田原洞穴遺跡と野国貝塚の分析結果に加え、先行研究で報告されている他の遺跡出土のイノシシ資料のデータから、それぞれの時代や地域におけるイノシシ属の利用について検討する。

Exploitation of *Sus* Specimens in Prehistoric Ryukyu Islands

Kei AONO · Hitomi HONGO · Chiaki KATAGIRI

4日(土)
10:00~10:20

縄文時代前期の北陸地方における採貝活動 —淡水域から汽水域の利用を中心として—

小島秀彰(若狭町歴史文化課)
kojima-hi@town.fukui-wakasa.lg.jp

福井県から新潟県に至る日本海に面した北陸地方では、太平洋に面した東北・関東・東海地方に比べ、長期間継続する大規模な縄文貝塚が形成されず、出土貝類の組成にも違いがみられる。縄文時代前期において、福井県若狭町鳥浜貝塚に代表されるように、低湿地性貝塚も少数ながら分布する。本報告では、北陸地方の貝塚群の貝類組成をまとめ、淡水産貝類の優先する鳥浜貝塚と汽水産貝類の優先する富山市小竹貝塚を指標として、主に淡水域から汽水域の採貝活動の特徴を明らかにする。

特に破損の度合いが高い鳥浜貝塚の淡水産貝類の定量化の方法として、殻頂部の点数を計数するのではなく、重量で計量する方法を採用した。これにより、少なくとも遺跡内における汽水産・海水産貝類との重量比率を明らかにすることができた。鳥浜貝塚・小竹貝塚出土ヤマトシジミについて、殻長による遺跡間サイズ比を検討したところ、前者で地点・層位別のサイズ差がわずかなのに対し、後者には顕著に認められた。採取季節の差等の要因について検討が必要と考えた。

The Gathering Activity of Shellfish Mainly from Freshwater to Brackish Water
in the Hokuriku Region of Japan during Early Jomon period

Hideaki KOJIMA

4日（日）
10:20～10:40

弥生時代におけるニワトリの継代飼育の可能性を探る －奈良県田原本町唐古・鍵遺跡資料の検討から－

○江田真毅（北海道大学総合博物館）・泉洋江（北海道大学総合博物館）
・米田穰（東京大学総合研究博物館）・藤田三郎（田原本町教育委員会）

edamsk@museum.hokudai.ac.jp

ニワトリは東南アジアに生息するセキショクヤケイを主たる祖先とする家禽である。日本列島には弥生時代に持ち込まれたと考えられているものの、その詳細な年代は明らかでない。また、発表者らは形態の性的二形に着目した研究から、弥生時代のニワトリはその大部分が雄であり、ニワトリは日本ではほとんど継代飼育されていなかった可能性を指摘してきた。奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡の第58次調査（西地区）では、弥生時代中期初頭の区画溝（幅3m・深さ0.9m）からキジ科の骨が9点出土した。そのうち足根中足骨は形態からニワトリと同定されたものの、幼鳥の骨を含む他の骨がニワトリに由来するかどうかは特定できなかった。一方、発表者らはコラーゲンタンパクの制限酵素断片を飛行時間型質量分析計で解析することで、日本産のキジ科野生鳥類とニワトリの骨を識別する方法を確立してきた。

そこで本研究では、唐古・鍵遺跡出土のキジ科の幼鳥資料を対象に、発表者らが確立したコラーゲンタンパクの質量分析による同定と放射性炭素年代測定を実施した。その結果、当該のキジ科幼鳥資料ではニワトリに固有のピークが確認され、ニワトリの幼鳥のものであることが分かった。また同資料の較正年代は紀元前3世紀～4世紀であり、溝の開口年代と一致することが確認された。これらの結果から、少なくとも唐古・鍵遺跡では弥生時代中期初頭からニワトリが継代飼育されていたことが示唆された。

Exploring the Possibility of Successive Breeding of Chickens in the Yayoi Period, Based on Zooarchaeological Analyses of Bones from the Karako-Kagi Site, Tawaramoto Town, Nara Prefecture

Masaki EDA・Hiroe IZUMI・Minoru YONEDA・Saburo FUJITA

4日（日）
10:40～11:00

古墳時代のヤマトにおける牛馬渡来と普及

丸山真史（東海大学）
maruyamasashi@tsc.u-tokai.ac.jp

従来、ウマの渡来と普及について、『日本書紀』に登場するカワチ（河内）の馬飼いや、埋葬馬が出土している葦屋北遺跡、日下遺跡などのウマの飼育に関連する遺跡が多くある河内平野（大阪府）が注目されてきた。一方、河内とならび、王権中枢の所在地と目されるヤマト（大和・奈良盆地）には、『日本書紀』に「倭飼（やまとのうまかい）」がみられる。しかしながら、奈良盆地におけるウマの渡来および普及について不明な点が多い。

奈良盆地では、田原本町の唐古・鍵遺跡や十六面・薬王寺遺跡で5世紀前葉と比較的早い段階（TK216型式期）の馬利用がみられ（丸山・藤田2014）、最近では橿原市で古墳時代中期のウマ遺存体の出土が相次いでいる。新堂遺跡ではウマの利用が5世紀初頭（TK73型式期）まで遡り（丸山2020）、土橋（小槻）遺跡では5世紀前葉（TK216型式期）の方墳の周溝からウマの頭部（上顎臼歯と下顎臼歯）が出土し、殉葬の可能性のある例が追加された（丸山2020）。そのほか奈良盆地では、5世紀代のウシの出土例もあり、奈良盆地における牛馬の出土分布を時系列で整理し、ウマの渡来から普及までの動態を考察する。

丸山真史・藤田三郎2014「唐古・鍵遺跡出土の古墳時代中期の馬骨について」『田原本町文化財調査年報22』田原本町教育委員会 pp.149-156

丸山真史2020「2区動物遺存体」『新堂遺跡IV』橿原市教育委員会 pp.221-225

丸山真史2020「SD090-S出土馬歯について」『奈良県遺跡調査概報2019年度（第2分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 p.81

The Introduction and Spread of Cattle and Horse in Nara during The Kofun Period
Masashi MARUYAMA

4日（日）
11:00～11:20

群馬県金井遺跡群における鹿角利用

山崎健（奈良文化財研究所）
yamazaki-t67@nich.go.jp

群馬県渋川市の金井遺跡群では、人とともに被災した馬や集積した鹿角など、6世紀初頭の様名山噴火による火砕流堆積物で埋もれた様々な動物遺存体が出土した。本発表では、このうち鹿角について報告する。

金井下新田遺跡の囲い状遺構内部で集積して出土した鹿角は、鹿角製品の製作に関わる資料群である。想定される生産品によって①廃材と②素材の2つの解釈が考えられる。まず、先端部や幹部（縦裁含む）を利用した鹿角製品の廃材であった可能性がある（①）。先端部や幹部を素材とした鹿角製品とは、例えば鍔装具、刀子や鉾の柄、鹿角製小札であり、隣接する同時期の金井東裏遺跡から出土している。また、切断した分岐部を利用した鹿角製品の素材保管の可能性も排除できない（②）。切断した分岐部を素材とした鹿角製品とは、例えば刀剣装具であり、同じ渋川市に所在する5世紀後半の浅田古墳群から出土している。廃材と素材という2つの解釈は必ずしも対立するものではなく、「先端部・幹部素材の鹿角製品を製作した残りの鹿角を、分岐部素材の鹿角製品を製作するために保管していた」という説明も成り立ちうる。

囲い状遺構は、小型倭鏡や盾形石製模造品などが出土しており、特別な区画であったと推定される。囲い状遺構の内部から、集積した鹿角とともに生産残滓と考えられる鹿角片も出土しており、単なる鹿角製品の生産工房というよりも、祭祀など特殊な製作行為が想定される。

Utilization of Deer Antler in Kanai Sites, Gunma Prefecture
Takeshi YAMAZAKI

4日（日）
12:30～12:50

古病理と解体痕による中世馬の用途の検討

植月学（帝京大学文化財研究所）

uetsukim@gmail.com

鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡出土のウマ遺体について、生前と死後の用途を考察した。生前の用途は古病理学的手法により検討した。比較対象として製塩集落である茨城県村松白根遺跡で駄馬とされた可能性が高いウマ遺体群を用いた。下顎P2近心の銜痕は由比ガ浜で9割近くに確認されたのに対し、村松白根では4割以下であった。脚への負荷の指標となる中手・中足骨靭帯の骨化は中手骨内側で差が顕著で、骨化標本の割合は由比ガ浜の約4割に対し、村松白根では約6割であった。推定体高は由比ガ浜が平均約132cm、村松白根は約120cmであった。由比ガ浜は村松白根に比べてより大型で、銜を咬ませる頻度が高く、脚への負荷は軽かった。この差は駄馬的用途の村松白根に対し、由比ガ浜は乗用主体であったことに起因すると理解された。死馬の用途に関しては解体痕に着目した。頭蓋骨は多くが頭頂部から後頭部を欠く。頭頂部に切痕を留める例も1点あり、意図的に破壊し、脳漿を摘出していた可能性が高い。脛骨の骨幹部内側には横位の切痕が特徴的に認められた。同一個体の基節骨や中節骨に対応する切痕が認められた例もあり、位置的に筋（腱）の採取に関わると推定された。筋採取には皮を剥ぐ必要もあったと推測され、脳漿摘出痕からは脳漿なめしの存在も窺われた。本遺跡における死馬利用は皮と筋を含むものであったとみられ、中世都市鎌倉の馬利用について新たな知見が得られた。

Medieval Horse Utilization Examined by Paleopathology and Butchering Traces

Manabu UETSUKI

4日(日)
12:50~13:10

羅臼町オタフク岩洞窟および北見市中ノ島遺跡出土ヒグマ遺体の年代と安定同位体比―「熊送り」儀礼の起源と前近代の挙行形態をめぐって―

○佐藤孝雄(慶應義塾大学)・松林順(国立研究開発法人水産研究・教育機構)
・米田穰(東京大学総合研究博物館)

sato@flet.keio.ac.jp

羅臼町オタフク岩洞窟は、擦文文化終末期の土器群が伴う包含層中から、近現代の北海道アイヌによる熊送り(hopnire)の所産と酷似する特徴を備えたヒグマ頭蓋骨群が出土した遺跡として名高い。また、北見市中ノ島遺跡も送り儀礼に由来すると思しき擦文文化期およびアイヌ文化期のヒグマ遺体が出土した遺跡として知られる。発表者らは、上記2遺跡のヒグマ遺体群(オタフク岩洞窟: 9個体分、中ノ島遺跡: 2個体分)を対象に、所管機関の許諾を得て、炭素・窒素安定同位体比と放射性炭素年代の測定を試み、うち十分なゼラチン量を抽出できた9個体分の遺体(オタフク岩洞窟: 8個体分、中ノ島遺跡: 1個体分)について、サケの寄与率を反映させ、海洋リザーバー効果を補正したモデル年代も算定した。本発表ではその結果を報告した上で、「熊送り」儀礼の起源と前近代の挙行形態について明らかにし得た事柄を指摘する。

Radiocarbon Dates and Stable Isotope Ratios of Brown Bear Remains Unearthed from the Otafuku-iwa Cave in Raus and the Nakanoshima Site in Kitami, Eastern Hokkaido -With Special Reference to the Origin of the Bear-sending Rituals of the Ainu and Their Performance Styles in the Premodern Period

Takao SATO · Jun MATSUBAYASHI · Minoru YONEDA

4日（日）
13:10～13:30

1640～1663年に限定される貝塚の動物遺体 —北海道伊達市カムイタプコプ下遺跡からみる近世アイヌ文化期の生業活動—

○三谷智広（株式会社パレオ・ラボ／同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター）
・添田雄二（幕別町教育委員会）
mitani@paleolabo.jp

北海道伊達市カムイタプコプ下遺跡は、伊達市有珠地区で行われている学術調査によって発見された遺跡である。本発表で取り上げる貝塚は、貝層直上に有珠b火山灰（1663年の有珠山噴火）、直下に津波堆積物（1640年の駒ヶ岳噴火）が確認され、1640～1663年の23年間に限定される貝塚（SM004）である。貝塚は約9㎡、層厚20cmで、マウンド状を保っており、貝の二次的な移動は少ないことから、有珠b火山灰の堆積直前に形成されたと考えられる。

同定の結果、斧足綱のアサリを主体とし、腹足綱でヒメエゾボラが中心となる。硬骨魚綱は、椎骨で見るとニシン科が最も多い。哺乳綱の出土は少なく、加工痕のある鹿角とオットセイの上腕骨などが出土している。ニシン科は椎体3mmほどの大型個体が主体で、春に産卵のため沿岸に寄ってくる個体を利用したことがわかる。

SM004から出土したアサリについては貝殻成長線分析を進めており、現段階では夏に採取されたと思われる個体が確認されている。今後分析数を増やす必要があるが、SM004の形成季節には春～夏が含まれ、特にこれらの季節を中心に形成された可能性が高い。

また、渡邊・宮地（2019）による有珠地区の貝塚出土アサリを用いた安定同位体および成長線解析では当時夏が短かったことが判明しており、本貝層の規模や厚さ、有珠山噴火（新暦の8月）の時期を考え合わせると、複数の季節にまたがるものの、ごく短期間に形成された貝塚と推定される。今後、貝殻成長線分析数の増加や他時期の貝塚との比較などを通じて、年代をほぼ特定できる一時期の貝塚について、詳細を明らかにしていきたい。

本発表は、JSPS科研費19H01352「巨大噴火・津波の痕跡を軸とした17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究（研究代表者：添田雄二）の助成を受けて行われた。

Faunal Remains of Shell Mounds from 1640 to 1663: A Study of Livelihood Activities during the Early Modern Ainu Culture Period at Kamuitapukopushita Site, Hokkaido

Tomohiro MITANI · Yuji SOEDA

4日（日）
13:30～13:50

四谷一丁目遺跡における鳥類利用

○許開軒（北海道大学大学院）・江田真毅（北海道大学総合博物館）

kyo@eis.hokudai.ac.jp

四谷一丁目遺跡は東京都新宿区四谷1丁目5ほかに所在する遺跡である。同遺跡は、寛永13年（1636年）の江戸城外堀普請前後に起立した旧四谷塩町一丁目のほぼ全域と旧麴町十一丁目・同十二丁目の3つの町屋敷にまたがる場所に位置する。本発表では、平成27年～平成29年1月に実施された第6次調査で出土した鳥類遺体の分析を通じて、四谷一丁目遺跡における鳥類利用を検討する。

四谷一丁目遺跡の出土鳥類の同定破片数はキジ科（ニワトリ、キジを含む）が約60%、マガモ属などを含むカモ亜科が約19%、ガン族が12%でこれらの分類群で約90%を占めた。そのほか、タカ科、カラス科、ウ科、コウノトリ科、ツル科、トキ科などの分類群も認められた。一方で、同遺跡で利用された鳥類の主体は時代によって大きく変化し、17世紀にはキジ科、18世紀から19世紀前半にはカモ科、19世紀後半にはニワトリを中心としたキジ科が主体をなしていた。また、他の分類群に優占したニワトリを中心としたキジ科では、約9%は幼鳥もしくは若鳥の骨であった。髓腔の観察が可能な資料のうち約7%で骨髓骨が確認された。

発表では、各分類群の出現頻度およびキジ科の幼鳥と骨髓骨の出現頻度の時間的・空間的分布に着目して、近世町人による鳥類利用、とくにニワトリ利用の時間的変遷と空間的異同について議論する。

Bird Utilization in Yotsuya-1-chome Site

Kai-hsuan HSU ・ Masaki EDA

4日（日）
14:10～14:30

考古学から見た北海道のマルタニシ

○松本建速（東海大学）・桑原康裕（北海道立総合研究機構水産研究本部栽培水産試験場）
takehayama@tsc.u-tokai.ac.jp

マルタニシ *Cipngopaludina chinensis laeta* は、日本列島の本州島では縄文時代以前の遺跡からの出土例が無く弥生時代以降に急増することから、水田稲作にともなって帰化したと推定されている（黒住2001）。西表島の同種についても17世紀の人間の移住時に水田耕作に伴って持ち込まれたと理解されている（北條ほか2014）。ミトコンドリアDNAによる解析では、中国産とは明確に違うが朝鮮半島産のものと日本列島産のものとが分けられない（Hirano et al.2015）。日本列島のマルタニシは弥生時代に朝鮮半島から稲作とともに移入された可能性が高い。

マルタニシは主に水田に生息するが（増田2011）、近代以降の入植者によって水田が営まれた北海道にも分布する。他方、先住のアイヌ民族は一部地域だけでしかマルタニシの呼称を持たないばかりかその名も海産巻貝と同じであり（知里1976）、同種は認識されていなかった可能性が高い。北海道の同種が近代以降に人間に持ち込まれたことを示唆する。

そこで松本は道内各地の水田およびその地域の開拓者の入植元のマルタニシを採取し、ゲノム解析してそれを確かめることとした。その過程で、道内各地の同種の生息地に関して、桑原から情報の提供を受けた。今回、北海道のマルタニシが人間による搬入か否か、考古学的知見を交えて考察した。その途中経過を報告する。

Archaeological Study on Viviparid Snails in Hokkaido
Takehaya MATSUMOTO ・ Yasuhiro KUWAHARA

4日（日）
14:30～14:50

中国地方におけるカワニナの食習俗

○遠部慎（島根大学山陰研究センター）・松田凌馬（愛媛大学）
onbe@facility.hokudai.ac.jp

筆者らは広島県域を中心としたカワニナ習俗についての聞き取り調査を行ったが（遠部・松田2020）、その後も継続して調査を行っている。その中で主に山陽地方を中心としたデータを得ることが出来たのでその成果についてまとめ、発表を行う。特に岡山県域では、文献記録と採取方法について興味深い知見が得られたので主にそれらについて確認することとし、その地域性などについても論じることにはしたい。また、実際の調理法や民俗事例で確認された知見など、遺跡情報にフィードバック可能なものなどについても論じ、その課題などについても言及する。現在、急速な勢いで失われつつある習俗であると同時に、改めて考古学研究の上でも重要なテーマであることについても再論したい。

Use of *Semisulcospira libertina* in Chugoku District
Shin ONBE · Ryoma MATSUDA

4日（日）
14:50～15:10

遺跡出土骨の全ゲノム解析における方法論的検討

覚張隆史（金沢大学）

japanese-native-pony8@hotmail.co.jp

遺跡出土人骨および動物骨のDNA分析は、全ゲノム領域のDNA配列を解析するゲノム解析が主流となってきた。ゲノム解析はDNA抽出に関連する実験手法とDNA配列データに関連する解析手法という2つのモジュールで構成されており、両者モジュールの方法論的検討が近年精力的に進められてきた。DNA抽出においては、側頭骨錐体部内腔（C地点）、耳小骨および歯セメント質などの局所部位のサンプリングの方法論的な検討が進められてきたが、温暖湿潤地域における遺跡出土骨における分析成功例については十分な比較検討がなされてこなかった。そこで本研究は、日本列島を含めた世界各地の遺跡出土骨の新規および既報の古代ゲノムデータを用い、手法間・地域間におけるゲノム解析の成功率の相対的な評価を試みた。その結果、既報データにおける比較の場合、東アジア・東南アジア・中米・西アジアにおける分析において特定の一塩基多型部位（SNP）を濃縮する手法の適用がほぼ必須であることが示唆され、全ゲノムデータの取得は極めて困難であることが示唆された。一方で、これらの同一地域における新規データの取得を進めた結果、SNP濃縮法を適用しない場合でも全ゲノムデータの取得が可能であることが新たに判明した。これらの結果は、古代DNA抽出モジュールの実験手法において改良の余地があることを示している。

Evaluation of the Successful Rate in Genome-wide Analysis from Bone Remains

Takashi GAKUHARI

『動物考古学』原稿募集のお知らせ

『動物考古学』第39号（2022年3月刊行予定）の原稿を募集します。投稿締切は2021年9月末を予定しております。査読結果によっては次号掲載に間に合わない場合もございますので、早めの投稿をお奨めします。投稿は随時受け付けております。学会誌の充実のため、積極的な投稿をお願いします。

<原稿の種類>

原著論文：未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの
研究ノート：論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの
総説：特定の主題について研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの
調査報告：考古学、民俗・民族学、生物学などの調査の成果報告
資料紹介：重要資料の紹介
雑録：書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など
出土動物遺体速報：2021年度に刊行された報告を主な対象とする

投稿規定と執筆要領は動物考古学会HP (<http://www.zoarch.net>) および38号に掲載されていますので、ご参照ください。

<投稿先>

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2
帝京大学文化財研究所 植月
E-mail : uetsuki_main.teikyo-u.ac.jp
@

『動物考古学』編集委員

委員長：植月 学

委員：石丸恵利子、江田真毅、菊地大樹、小島秀彰、澤田純明、建石 徹、津村宏臣